

【一】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

死なせるとか、ころすとか、まことにおだやかならぬことを、これはまたしごくおだやかな調子でいつているので、なんのことなのかときき耳をたてたら、壁土づくりの話をしているのだった。死なすのころすのとは、腐らせることなのである。念入りな建物には、壁もまた念入りになるが、そういう時、壁の材料である土は、二年も三年もかけて、いちど十分に腐らせてから使う。その腐らせることを、話していたのである。

職人さんたちは、よく、たいへん的確なものいいかたをする。いかにもその職らしい、たくみな言葉を使う。死なす、ころす、ほどの職の人もよく使う言葉だが、この激しい言葉がいわれるときには、その状況や感情が、実に目に見るようわかることが多い。しかしそれにしても、土をころすとは、どういうことなのかと思つた。ものを腐熟させることは、などという、やさしい言葉も使うのだから、それをころすと荒々しくいうのには、それ相当のなにかがあるのだろうと察した。するとその私の気持ちを見ぬいたように、なにしろ土は生きているのだから、ころさなければ思うようには使えない。それに土は性根の強いものだから、死なすには相当ほねを折らなければならないのだ、という。やはり、ただ使っている言葉ではなくて、激しいいいかたに釣合うだけのものが、あるらしく察しられた。

土を死なすには、用量の土に、適当な水を加えて、こねる。土はやわらかくなる。それを縁高、中くぼみに形づける。くぼみの中に水をたたえる、縁高だから、水が外へ流れだしてしまうことはない。そのまま放置しておく。四季がめぐる。春の蒸すような暖気、つゆの長雨、夏のひでり、秋の冷え、厳冬の凍上と、土はいためつけられて、だんだんと腐っていく。しかも、よりまんべんなく腐らせるために、この間に何度もこねなおされる。人の足で、踏みこねるのだという。つい思わ

ず、その作業を想像しておかしくなった。子供のどろんこ遊びとおなじで、なんと汚らしく、そしてこっけいである。

遊びなどとはとんでもない、ナンギョウだという。鼻のもげそうな悪臭で、口もなにもききたくないほどな、がまんしている仕事だと、いまだ話すのにさえ顔をしかめる。嗅いだことのない人には、話してもとうていわからないが、あのいやなおいのなかで、くちやくちや踏んでこねるのは、とてもとても、けぶりにもおかしいなんてものじゃない——ときびしくいったものの、^①ちよつととまどつて考えているふうで「へんだな、こうして実地の仕事でなく、話だけのことでしゃべってみると、あの作業は、やはりなんだかおかしいな。話だと、くさいということ自体が、もうおかしさをくすぐるし、しかもそれを足でこねる、とくればいかにもこっけいだ」ととうとう自分が笑いだす。シマツになった。

が、当人にそう笑われると、今度は逆にこちらが笑えなくなつて、もし自分がその作業をやらされたとしたら、どんな思いがするか。鼻のもげるようなにおいと、こねかえした土の汚らしい色や、ぬらぬらする触感などを想像すると、それがどんなに気色のわるい仕事か、ほぼ推察がつくのだった。悪臭とよこれの実作業からは、こっけい感など毛ほどもありはない。だのに、ただ話できけば、なにかおかしくなるのは、どういうわけだろう。それが実地と話とのちがひ、というものでしょうか。

それはさておき、^②そういう作業をくり返すのが、つまり、生きている土をころす、ことなのである。では、土が生きている、とはどういうことなのか。土が、本来持っている自分の性質を持ち続けているかぎりには、生きている土なのだという。それなら、土本来の性質とはなにか、といえばそれは、固まる、ということなのだ。時や場合によっては、固まるというその本来の性質が、本来のまま非常に役にたつ。しかし、念入りな壁をつくらうとする際の壁土としては、土本来の性質のままに固まられたのでは、いい壁にはならない。勝手に固まるから、壁に塗り上げたあと、干割れ、ひびわれが入ってしま

うからである。だからどうしても、性来の固まる性質を一度腐らせ、ころして、いわばくせぬきをするのである。くせをぬかれて、仕上がった土は、さらさらしているし、色もさらされて淡くなっている、という。そうなつてはじめて、壁土として役にたつのだが、実際に壁に塗る段になれば、そこで**切と呼ばれるつなぎを入れることになる**。固まるくせをぬかれた土なのだから、つなぎをませるのである。

こうきいてくると、死なすころすという激しい言葉が、無理ないものだということがよくわかる。本来の性質をもつたまの土を、生きている土と考える考え方もおもしろいし、本来の性質をぬいてしまう操作を、ころす死なす、という言葉で表現するのもおもしろい。そのものの形態も、そのもの本来の性質も、ともに消しきつてしまうのが死というものだが、この場合は、本来の固まるという性質だけを消して、土そのものの形は残る。しかし、本来の性質をもっている土を、生きている土と考えるのだから、その性質を消そうとする時、それはまさに、死なす、というほかないのである。こちらの意志や力をあえて加えて、死なせるのである。その死なす、ころすという言葉は、みごとにぴたりと、**事柄にあてはまっている**のだった。

生きている土という考え方、そしてそれを死なすといういいかた——**職の人が、その職のことを話すとき、言葉と事柄にズレがないのが心にしみた。そしてもう一つ、心にしみたのは、鼻ももげそうだという悪臭のことである。**その話のときつい、くさいものをこねる人の姿を想像して、子供の遊びのような、と私は口をすべらせたのだが「とんでもない、けぶりにもおかしいなんてものじゃない」と真顔ではねかえしてきた、それほどのその悪臭のことである。ものがいのちをおえれば、たいがい**臭気をはなつ**。それが自然の仕組、筋道である。土といえども、その筋道はおなじといえる。死なされて、悪臭を放つのは当りまえだ。だが、思えば死なされたのは、土のからだ——からだといえるかどうか心もとないが、とにかく

く土の形そのもの——ではなくて、持っている性質なのである。生まれつきの性質というか、自我の強いままにある性質というか、それがころされたのである。死なされたのは、気ままに固まりたがる、本来の性質だった。だから、鼻のもげそうな悪臭は、あるがままの、勝手気ままなその性質がころされようとする時、抵抗し、抵抗し続けて、うめいて、身をしばって放った臭気だ、とそんなふうには思う。

そう思ったとき、なにかしきりに感情を去来するものがあつた。そんな悪臭をあげなければ、死ぬにも死なれない持つて生まれた性質というもの。自分自身もがいて苦しまなければ捨てられないもの、そしてそれは周囲の人をも辟易させるものなのである。持つて生まれたのがいい性質ばかりなら、いうことはない。だが、自他をともしいためるいやな性質を、だれでも、多少はいわず、かならず持つて生まれているのである。その性質を捨てなければ、という**チュウコク**はだれでもが身におぼえがあるう。親から師から友人から、多かれ少なかれ、注意されたはずである。持つて生まれた性質——それを思いあわせれば、ひどい悪臭を放つて、最後まで人を困らせながら、ついにその性質をぬきさつていく土は、**私にはひとごと**の話ではなく身にしみた。最初にきいたときは笑つた悪臭だが、いまは心ひかれる悪臭である。我が身にも内蔵していることがたしかな、**哀しい悪臭**といえるのだった。くせをさつて、新しく**素直な性質**に生まれかわる、壁土あわれ、といった。職の人たちが、**臭気の強さを、土の根性の強さに比例するもの**のように考え、従つて自分たちの作業もまた、その割合でがまんを強いらられるのも、仕方のない自然の筋道だ、というように**素朴で、しかも動じない態度**をもっているのにも、心をうたれる。

いま私たちの住居には、土を塗りあげてこしらえる壁は、ほとんど消えかけている。多く**板壁、貼壁**である。時代で、住

問五 ——線部④「私にはひとごとの話ではなく身にしみた」とありますが、どうして「身にしみた」のですか。

問六 ——線部⑤「臭気の強さを、土の根性の強さに比例するもののように考え、従って自分たちの作業もまた、その割合でがまんを強いられるのも、仕方のない自然の筋道だ」とはどういうことですか。次のア～オから選んで、記号で答えなさい。

- ア 土の性質は自然からあたえられたものだから、人に合うように作り変えないといけない。
- イ 土は土としての性質を持つから土なのであって、土ではないものに変えることはできない。
- ウ 自然によって作られた土の性質を、人間の手によって作り変えることは決してはいけない。
- エ 土がもともと持っている性質を人の手で変えることは、職人にしかできないわがが必要である。
- オ 土が本来もつ性質をころすのだから、そのひきかえに悪臭にたえなければならぬのも当然だ。

問七 「死なす・ころす」という職人の言葉に対して筆者はどのような感想をいただきましたか。文章全体を読んで、五十字以内でまとめなさい。

問八 次の1～4について、本文の内容と合っているものには○を、合っていないものには×をつけなさい。

- 1 職人たちがわざわざ「土をころす」のは、ひびわれのしなやかさとした土壁をつくるためである。
- 2 「土をころす」という作業を言葉から勝手に想像して笑った自分はつまらない人間だと筆者は思った。
- 3 板壁や貼壁が多くなって土壁のよさが見失われていくのは、日本の伝統の危機だと筆者は考えている。
- 4 昔とちがって現代においては、土壁はお金持ちが趣味で建てる家しか用いられなくなってしまった。

問九 この文章の表現についての説明としてふさわしくないものを、次のア～オから選んで、記号で答えなさい。

- ア 筆者は「くちやくちや」「ぬらぬら」といったことばを用いることで、土のようすをイメージ豊かに表現している。
- イ 筆者は左官職人の話を聞き、その作業のようすをあたかも実際に見たかのようにえがいている。
- ウ 筆者は色を表すことばをたくさん用いることで、土にひそむ色の豊かさを表現している。
- エ 筆者は「ころす」「いためつける」などの表現を用いることで、あたかも土が生き物であるかのようにえがいている。
- オ 筆者は会話文を用いることで、左官職人とのやりとりを生き生きとえがいている。

問十 ——線部1～5のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。(一点一画をていねいに書きなさい。)

【二】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

三時間めは算数だった。吉田先生は小数の割り算の問題を黒板に五題だけ書くと、

「ノートにやって、できた順に持ってくるように」と言った。

二学期に入ってやりはじめたところの問題だった。割る数の小数点を数字の最後に持って行って、その桁数の分だけ、割られる数の小数点を右に動かす。覚えていた。いっせいに黒板の問題を写しはじめるみんなにつられるように、コウゾウも急いで写しだした。

一題めは簡単にできた。二題めも、三題めも簡単だった。

① 心臓がどきどきしてくる。四題めの途中で、文子が立って先生の机に行った。続いてほかのだけれども立ち上がって行く。あせってなかなか、シチロクが出てこない。鉛筆を握った指が震えた。

「シジュウニ」

出た九九が声になった。

「池田、よーし」

文子は全部正解したらしかった。

コウゾウも五題めにかかっている。いすの音がガタガタ騒がしくなって、何人かが並んでいるのが見えた。

——できた。

コウゾウは、文子が席に着こうとするのと入れ違いに立ち上がった。

「できた？」

文子がきいた。

「うん」

ぱつと答えると、先生の机の前でできている列の最後についていた。見渡すと、まだ半分くらいの生徒が問題に取り組んでいる。コウゾウは急に 。何だか、とんでもない勘違いをして、並んではいけない列に並んでいるよう

な気がした。

黒板の問題の数を見た。五題だ。右手に持っているノートを確かめる。五題全部終えている。

後ろに、文子の前の席の啓子が並んだ。

「全部、終わったんけ」

② 疑っている言い方だった。

「ああ」

「へーえ、ほんとげ？」

③ 啓子は驚いている。コウゾウが返事をしないでいると、ノートの角でついてきた。

「答え、ちゃんと見直してきたが」

「ああ」

「どーれ、見せてみな」

啓子がコウゾウのノートを取ろうとしたが、コウゾウはノートを放さなかった。

「間違ったら、また並ばなくちやなんねんだがら」

「かまわね」

コウゾウが A 言うと、

「親切に言ってやってんのに、ねえ」

と、後ろに並んだ和子にあいづちを求めている。

——おれだって、そのくらい知ってる。

そう言おうとして、コウゾウはこの前いつ並んだかなと考えた。思い出せなかった。

「途中でいいから、持ってこい」

先生にそう言われてから持っていたことも、ずいぶんと前のような気がする。

——どうせ、おれなんか。

いつもそんな気持ちだが、ノートを持って並ぶことも、手を上げることもさせなかった。勉強も宿題も、どうせできっこないと思うとどうでもよくなった。

先生がOKとか、できたとか言いながら、手際よく前の子たちをさばっていったので、すぐコウゾウの番が来た。

先生は顔も見ないでノートを受け取り、さっと一題めに大きな丸をつけた。

コウゾウは丸が一つつくたびに ④ 胸をどきどきさせた。二つ、三つ、四つと丸がついて、そこで先生が手を止めて顔を

上げる。

「おっ、だれかと思つたらコウゾウじゃねえか、珍らしいな」
⑤ひつくりした声を出した。教室じゆうが騒がしくなった。

「これは、5か6か、どっちなんだ」

先生が答えの数字をきいてきた。コウゾウでさえ、6と読んでしまいそうな5だった。

「5」

コウゾウが B 言つと、先生はいちばん大きな丸をつけ、十二と書いた。

「十二番めつてことだ、がんばつたなコウゾウ」

先生はコウゾウがノートを取ろうとして引つ張つてもなかなか放してくれなかった。

「やればできんだぞ、コウゾウ」

「うん」

素直な返事ができた。

——おれだつて、やればできんだ。

コウゾウは何度もそう思つた。チャイムが鳴りおわつても、
⑥胸のどきどきが止まらなかつた。自然にやけてしまう顔

まず、のぼるが口を開いた。

「コウゾウ、いかつこ見せつべつて、ズルすんじゃねえぞ」
何のことか分からなかつたが、いすから立ち上がった。

「何だ、ズルつちやあ」

コウゾウはのぼるをにらみつけた。

「とぼけんじゃねえ、コウゾウ。とぼけんだったら、言つてもいいんだな」

のぼるは勝弘たちを振り返つた。それからコウゾウにいいんだなともういちど念を押す。

「ああ」

「じゃあ、言つてやら、おめえ、隣の答え写して、先生とこへ持っていったんべ」

のぼるはすました顔で言つた。

「何を——」

コウゾウが一步踏み出した、そのとき、いすをがたと鳴らして、文子が立ち上がった。

「やめなさい」

コウゾウよりも大きな声だつた。

を見られたくなくて、ずっと下を向いていた。

休み時間になつて、先生が出ていくと同時に、コウゾウの周りにのぼるたちが集まつてきた。敏夫もいた。

のぼるの何か言いたそうな顔つきを見ても、コウゾウはどんなア言いがかりをつけられるのか、思い浮かばなかつた。ただ、いちばん先に手を出したやつに向かつていこうと決めている。

しばらく、殴り合いのけんかをしたことがない。やりあい
はあつても、殴り合いにならずにスんでいた。でもひとたびけんかになれば、コウゾウはどんなに殴られても最後まで向かつていく。相手が体の大きいやつだろうと何だろうと、かみついたら放さない「気違い野郎」になった。

のぼるの後ろから顔だけだしている勝弘に、山でピロつた小刀をといで光らせたのを見せて、「これがあれば、だれにも負けねえ」と、脅かしたことがある。

それ以来、のぼるたちは、コウゾウは何をするか分からな
いと考えている。「気違い野郎」とか、汚いかつこうをし
ていたから「こじき野郎」と、陰で悪口を言うようになった。

「何言つてるのよあんたたち、井上君はわたしとすれ違
つたのよ、どうやつて写せるのよ、ちゃんと事実を調べて言
いなさいよ」

一気に言つと、文子は大きく深呼吸をした。

「根も葉もないことで人を疑つて、あんたたちはずかしく
いの、情けないと思わないの」

と、さらに C 続ける。

「ほんと情けない、あたしだつて知つてんだから」

前の席の啓子が立ち上がつて怒鳴つた。

「うるせー黙つてる、おめえらに關係ねえ」

のぼるが大声を張り上げたのは、それが最後になった。啓
子に騒がれたら、負けたのと同じだ。すぐ先生に言いつけら
れてしまう。

「女だと思つて甘く見てりや、つけあがりやがつて——」

のぼるたちは、ぶつぶつ言いながら、席にもどつていった。
コウゾウはすぐ、帰りの待ちぶせを覚悟した。それでもラ
ンドセルの中にはあの小刀が入っている。構えただけで逃げ
だすだろう。

だが、文子には困ってしまった。机に顔をふせて、泣きだしたのだ。殴り合いにならずにすんだのはありがたかったが、どうして関係のない文子が泣くのか、コウゾウには見当がつかない。どうしたらいいのかも分からなかった。

それでも、何か文子に悪いことをしたような気がして、「わりがったな」

と、すすり泣いている背中に向かって言った。⑦ ふせたままの頭が小さく左右に揺れた。

天気予報どおり、五時間めが始まったころから、雨が降りだした。のぼるたちは、雨の中でも待ちぶせをかけるほどの根性があるだろうか。たぶんないだろう。文子と啓子が言っていた「情けない」が似合っているようでおかしかった。

それでも、待ちぶせを誘うように、わざとゆっくり教室を出た。

昇降口に、先に帰ったはずの文子と啓子がいた。啓子はコウゾウを見つけると、いいところへ来たとばかりに、声をかけてきた。

「うん、しょうがね」

コウゾウは啓子に傘を渡しながら、もういちど外の雨を見た。雨の中に里芋の畑が見える。いいものを見つけたと思った。

「悪いわよ」

文子は、啓子から傘を受け取るうとはしなかった。

コウゾウはじれったくなって、

「おれ、いいもの見つけたから、気にしないでいいがら」

と、里芋畑に向かって走りだした。

「ああっ」

文子が驚いている声を、コウゾウは雨にたたかれながら背中
中で聞いた。用水堀をとび越えて、里芋畑にしゃがみこみ、
大きく葉の広がった茎を根元から引きちぎった。里芋の葉を
傘のようにしてさっと立ち上がり、昇降口のほうを振り返る。

「コウゾウ、似合ってたお」

「コウゾウ、おめ、傘持ってたっぺ」

「うん」

「じゃあ、文ちゃんに カしてやれ」

D 言った。

「いいわよ、井上君が困るじゃない」

文子は、啓子の言ったことに慌てている。

「いいんだって。コウゾウはいつだって駈けて帰ってんだから、なあ」

「うん」

啓子の イキオイにつられて、コウゾウは大きくうなずいた。そしてすぐ、本当に駈けて帰る気になった。どしゃ降りに近い雨だったけれど、文子を泣かしてしまった罪ほろぼしと思えば何でもない。

「だってえ」

文子はまだ 尻ごみしている。本当に悪いと思っているようだ。

「町の学校じゃ、ちゃんと学校に傘が置いてあんだってよ。いなかの学校はしょうがねえよな、コウゾウ」

啓子が口に両手を当てて怒鳴っている。そして、コウゾウを指さして、笑いだした。

「ありがとう」

文子が E 手を振っている。

コウゾウは芋の葉を上げ下げして見せた。上、下、上、下を繰り返していると、雨、雨、ふれふれという歌のリズムが浮かんできた。顔をつたつてしたたる雨を口に受けながら、コウゾウは歌いだした。

「♪雨、雨、ふれふれ、かあさんが

蛇の目でおむかえうれしいな

ぴちぴち、ちゃぶちやぶ、らんらんらん」

⑧ らんらんらん、のところでコウゾウは大きく飛び跳ねた。

(高橋秀雄『地をはう風のように』による)

※ 問いで、字数制限のあるものについては、すべて「や。や。や」「も字数にふくみます。

問一 — 線部①「心臓がどきどきしてくる」・④「胸をどきどきさせた」・⑥「胸のどきどきが止まらなかった」とありますが、それぞれのどのような気持ちですか。その組み合わせとしてふさわしいものを、次のア～カから選んで、記号で答えなさい。

- | | | | |
|---|---------|----------|-------|
| ア | ①期待とあせり | ④緊張とあきらめ | ⑥満足 |
| イ | ①期待とあせり | ④緊張とうれしさ | ⑥よろこび |
| ウ | ①期待とあせり | ④緊張とうれしさ | ⑥不安 |
| エ | ①期待とおごり | ④緊張とうれしさ | ⑥よろこび |
| オ | ①期待とおごり | ④緊張とあきらめ | ⑥不安 |
| カ | ①期待とおごり | ④緊張とあきらめ | ⑥満足 |

問二 に入ることばを考えて答えなさい。

問三 — 線部②「疑っている言い方だった」・③「啓子は驚いている」・⑤「びっくりした声を出した。教室じゅうが騒がしくなった」と、まわりの人が反応しています。「コウゾウ」はこれまでどのような態度をとってきたのですか。

問四 A E に入るものを、それぞれ次のア～オから選んで、記号で答えなさい。

- | | | | | | | | | | |
|---|--------|---|------|---|--------------------------------|---|---------|---|---------|
| ア | 気軽な調子で | イ | ぼそつと | ウ | 精一杯 <small>せいはい</small> の声を出して | エ | 泣きそうな声で | オ | 突き放すように |
|---|--------|---|------|---|--------------------------------|---|---------|---|---------|

問五 — 線部ア「言いがかりをつけられる」・イ「尻しつこみしている」をそれぞれわかりやすく言いかえなさい。

問六 — 線部⑦「ふせたままの頭かぶが小さく左右に揺れた」とありますが、「文子」のどういう思いを表していますか。

問七 — 線部⑧「らんらんらん、のところでコウゾウは大きく飛び跳ねた」について、

1 「コウゾウ」のどのような気持ちの表れですか。

2 どうしてそのような気持ちになったのですか。六十字以内で説明しなさい。

問八 この文章の表現や内容についての説明としてふさわしいものを、次のア～オから二つ選んで、記号で答えなさい。

ア コウゾウの心のなかのつぶやきを書くことで、コウゾウの気持ちをしていねいにえがいている。

イ コウゾウにお説教をしようと思った吉田先生は、コウゾウのノートをなかなか放さなかった。

ウ コウゾウをかばった啓子は、なにかとコウゾウのことを気にかけて、おせっかいを焼く人物である。

エ コウゾウは常にのぼるたちにいじめられており、のぼるの待ちぶせをおそれている。

オ 五時間めが始まったところから降り出した雨は、貧しさに苦しむコウゾウの気持ちを表したものである。

問九 ———線部1～5のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。(一点一画をていねいに書きなさい。)

